

富山大学教育学部国語科所蔵『遠やまびこ』 釈超空自筆修訂本について

呉羽 長

On the Book "To-yamabiko" by Shaku-Choukukh, which belongs to Office of Japanese Education in the Faculty of Education, Toyama University

Susumu KUREHA

(二〇〇二年五月二〇日受理)

はじめに

富山大学教育学部国語科研究室は、平成十三年三月五日、国語科専攻卒業生 本江進氏（昭和三五年三月中等教育科卒業、元高岡市立南星中学校校長）より、国語学・国文学・国語教育等に関するその所蔵図書（和装本・洋装本・雑誌）約五〇〇点の寄贈を受けた。

国語科研究室ではこれら図書について、国語科の教官・学生及び卒業生等大方の利用に供するため整理を行ったが、ここに掲げた釈超空『遠やまびこ』もその中の一冊である。本書は昭和二十三年三月好学社刊の初版本、四六判、総ページ数三三二である。更に本書表紙内側の遊紙（緑色の楮紙）表に薄桃色の箋紙（一七・一糎×五・一糎）が貼られ、それには「進上 作者」と墨書される。これはその筆跡より作者釈超空のものと判ぜられ、本書はその刊行時に釈超空がある人物に進呈した一冊と想定することができる。そして全四八二首を収める本書本文中には、三十九の歌もしくは小題に、右箋紙と同様の筆跡の朱（茶色を帯びる）による修訂が見られる。これは「進上 作者」とある箋紙と考え合わせ、釈超空が進呈の際加筆・訂正したものと思われる。またこのような修訂は超空がある人物に「進上」するなどの際行われるものであるから、上梓の後時間を隔てない頃の修正加筆と判断される。

なお、本書内題の右下には「洗心書林」と蔵書印が捺されている。

『遠やまびこ』は初版本が中央公論社の全集本第廿巻（昭四二・七）に収められているが、本書はその初版段階の本文に釈超空が新たに修訂を加えたものとして価値を有する。

ここにその修訂の記述を全て掲げること、釈超空が最終的に整えようとした『遠やまびこ』本文を示した上で、その修訂のありようを考察したいと考える。

一 修訂本文について

凡例

- 一、加筆訂正等の修訂箇所を掲げそのありようを示す際、便宜的にそれぞれの修訂箇所に通し番号を付した。
- 一、『遠やまびこ』は十一の歌群に分けられ更にそれぞれの歌群の中で歌が小題によって纏められているが、その歌群名ごとに修訂箇所を掲げることとした。○を付して掲げたものが歌群名である。
- 一、修訂箇所には傍線を引き、その部分がどのように変えられているかをその下に（ ）で括って示した。
- 一、もとの本文に加筆するだけの場合、挿入文字等を（ ）に括る形で示した。ルビに（ ）を付したものはそのルビが書き加えられたものであることを示す。
- 一、掲出した記事・歌の下の「」内の言葉はそれぞれの歌の小題である。またその下の数字は、「初」とあるのは初版本中で当該歌・記事のある箇所のページ数、「全」とあるのは全集本中のページ箇所である。

○雪ふた、び到る

1 山の村に 幾日すこして 出で来つる我の心の(は)、たのしまなくに

[凶年 初4・全48]

2 春ひねもす(山鳥)

[初6・全48]

3 年かへる日に逢ふ今日か。 旅にして 巷の人を(□□空白二マス分、以下同じ) 出で、

見むとす

[山鳥 初7・全48]

4 賑はしき年とはなり来。 門松に雪すこし散りて 人の音する

[山鳥 初9・全48]

5 炉は消えて 三畳の部屋の荒壁に、 (一)念彼観音 (二)の軸を かけたり

[瑞穂精舎 初12・全48]

6 乏しくて(□) 礼讃知る人は、(の)言ふことも(の) 我の心を たのしからしむ

[よき人 初16・全48]

初(はじめ)、大雪の来たのは、二月四日である。此夜にはかに、友人を亡ぶ。

7 如月の夜に積む雪の いちじるく生きくてこそ はかなかりしか

[雪ふた、び到る 初20・全484、485]

8 わが耳は聞かずやあらむ。 窓の木の 梢うごくよと 言ひたまひけむ(らめ)

[三矢先生 初25・全48]

9 十年あまり三とせを経たり。 師の道も かつあやまたず 我は来にけむ(り)

[三矢先生 初25・全48]

○はるかなる島

10 久高なる 島の青年の言ひしこと さびしき時は、 思ほえにけり

久高島。首里から陸路三里、海上三のつとの東海にある。神の島と言はれて来た。

人は神を思ふこと篤く、未、人にして神なる祝女の威力が、深く信じられてゐる。

常は女ばかり、其に、老廃の男の、寂かな(に) 生を営む(養ふ) 低平島である。

[はるかなる島 初33・全48]

唯、若い男も、遠洋の荒穢きに堪へぬ病弱な者ばかり(だけが)が、稀に寂しく残つて居る。

11 久高より還り来たりて、 たゞひとり思いひしことは、 人にかたらず

[はるかなる島 初34・全48]

12 波の音暮れて ひそけし。 火を消ちて 我はくだれ(り行きけ)り。 百按司の墓

[はるかなる島 初36・全48]

国頭郡運天港は(一)源為朝の舟は(の泊)てした地と伝へる。崖の高処・低処到る所に、古代の按司の墓と伝へて、陶甕に骨を取めた塚穴が、幾十となく散在してゐる。

13 鳥山の 春閑かなる日を経れど、 春唄うたふ乞食に あはず

[はるかなる島 初37・全48]

14 寒ざむと 佐渡に向ひて波ひろし。 ひたすら 海の色さだまりぬ(さたまれる色)

[波の色 初42・全49]

15 いにしへびと 我に言ふことのははれ(ねもころ)なれど、この人さへや 我をあざむく(にへつらふ)

[故旧 初46・全49]

16 へつらひを人に言はれ(せ)て さびしけくなり来る心 せむすべもなし

[故旧 初46・全49]

17 道のうへに立ちつゝわれは 山の(ナシ) 繩の わづかにうつるまひを見つ

[白布高湯 初54・全49]

18 土のうへに掘り竝べたる筈は(を)、(トル) とりつゝ見れば 指ばかりなる

[白布高湯 初55・全49]

○死者の書

19 死者の書 とゞめし人のこゝろざし。 遠いにしへも、 悲しかりけり(む)

[死者の書 初69・全49]

20 神像に彫れる えぢぶと文字よりも、 永久なるものを 我は頼(憑)むなり

[死者の書 初70・全49]

21 わが衣の 垢づく襟のあはれさを 歌によみしも(人)、この人なりけむ(あやまちをしつ)

[死者の書 初71・全49]

悪友会。我が同人のあひだに用ゐられたる反語なり。

22 かつぐに(も)へり行く友か。 花の下に 我がたのしきは、寂けかりけり
〔桜の、ち 初77・全50〕

23 銀座より疲れ帰りにて むくみたる脚をさすれる若者に 対す

その良彦も、既に亡し(き人なり)。
〔旧族 初84・全50〕

○山の端

24 村の子の 聞き羨しがるよき唄も 親はをしへず。 さびしむらしも(むか)
〔山の端 初135・全516〕

25 寺の子は 寺の子さびて遊ぶなり。 声(音)に立てども、音(声)ぞ ひそけき
〔曾我の里 初140・全518〕

26 山の上の雪(雲)は たひらになりけり。 いよいよ晴るゝ 川上の空
〔足柄上郡 初143・全518〕

27 あたゝかき積に居りて ねむりけむ(るなり)。 手の本ゆ出でゝ 手につたふ蜘蛛
〔足柄上郡 初148・全520〕

目を養ふとて、暇ある毎に野に出づ。 野は春至り、又返え返りて、景常にひとしか
らず。

28 水の瀬のあはれは 知るや。 昼たけて 夕づくころの(を?) 澱み行く音
〔自ら戒む 初151・全521〕

29 もの音は 今は聞えぬ(ず) 夕川の 瀬に立つ波の、 色のはげしき
〔自ら戒む 初151・全521〕

30 如月のはつか過ぎたる空の色。 夕月殊(すで)に 色めきて見ゆ
〔自ら戒む 初152・全521〕

○那覇の江

31 青波に入りて たちまち消え行きし(一) さびしき舟か(一) (ナシ)。 波照間の舟
〔那覇の江 初163・全525〕

32 思ほえぬ方になびける(たなびく) 汽車の煙。 敦賀へ向ふ軌道かゝやく
〔風ぐ潮 初167・全525〕

○風の中

33 深ふかと 林の奥に入り行きて 還らざりせば、 寂けか(しづかな)らまし
〔市井山沢 初241・全543〕

○夜の思ひ

34 道の上の高処の木むら かたよれる松隈大内陵を をが(望)み行く
〔大倭国原の歌 初264・全549〕

35 かくばかり さびしきことを思ひ居し 我の一世は、過ぎ行かむとす
〔夜の思ひ 初274・全551〕

○春王正月

36 睦月立つ 青やかにして一群の 繁れる草の(一) まだ残る庭
〔寂けき春 初282・全554〕

37 睦月たつ 海(き)の面あかる雨の後。 片より見ゆる隠れ 礁(パ)の群れ
〔春鳴く鳥 初292・全556〕

○鶯鳥

38 うづたかく積める貨物(モノ)の間より、 自動車主(オシ)が 笑ひつゝ、墮つ
〔日々の机 初312・全562〕

39 溝ばたに 芽出し柳の青あをと かく静けきも、(に) よろしかりけり(やすらはむ
とす) 〔汽車時々 初320・全564〕

二 修訂の意味

本書末尾の「追ひ書き」には、「この集には、昭和十年十一月から、おなじ十五年七月に渉る間の作物を集めた。」とあるが、巻末の「製作年表」によれば昭和十六年一月から五月までの歌を含んでいる（高橋六二氏「遠やまびこ」、『別冊国文学』昭和62・5所収による指摘）。このように昭和十年から十六年にかけて詠まれた歌を、同二十三年三月に歌集として刊行した後、あらためて所収歌を見直したものが本書朱書による修訂といえる。

修訂のありようは、誤植を正し（前節に掲出した歌・小題に付した番号で26、ここでは「雪」を「雲」に改める。なお、以下歌・小題を示す場合、同様に番号で示す）、ルビを付して読みを明確にしたり（4・35・37・38）、助詞を削って語調の整えたり（17）している点がまず指摘できる。また空白を挿入したり（3）読点を付す（36）など歌を読む際の区切りを明瞭にしている。更に漢字を仮名書きにしたり（7）歌語に「」を付したり（5）、よりふさわしい意味の漢字を当てたり（20）して、その語のイメージを的確・明瞭にするいは強調する修訂も見られる。

歌語等のイメージを的確・明瞭にする例としては、更に以下の例が挙げられる。

14 番歌では下句「ひたすら 海の色さだまりぬ」という完了で終わる詠出時の形を体言で止めることで、静止的な情景として広く落ち着いた雰囲気を作っている。

15 番歌では「あはれ」を「ねもごろ」に、「あざむく」を「へつらふ」に変えることで土地の老人が卑下の心をもって自分にへつらう様のいたたまれぬ思いを明確にする。

18 番歌では「掘り竝べたる筍は」の「は」による筍への注視の語気を「を」という目的を示す助詞に変えることで押さえ、下句で「指ばかりなる」という驚きを効果的にする。

19 番歌も「速いにしへも、悲しかりけり」の「けり」を推量「けむ」に変え、「悲し」の主体を「とどめし人」として明確にする。

25 番歌では寺の子が寺の子らしく遊ぶ様子も、「声に立てども、音ぞひそけき」の「声」と「音」を逆にして、物音として聞こえるが声としてははつきりせずひそやかな様であるという形にするよう言葉が選ばれている。

29 番歌では「もの音は 今は聞えぬ夕川の」とある三句切れを「聞えず」と二句切れとして、まず静けさを喚起し、その川波の美しさを鮮明にする。

32 番歌では「思ほえぬ方になびける」の「る」という存続の語を削って「たなびく」に替え、動勢を強めて汽車の動きに対応させている。

加えて2番の小題「春ひねもす」を「山鳥」としたことには、この歌群が昭和十一年新春を主に詠むものであり、春ののどかさを表す「春ひねもす」では季節としてやや穏当を欠くと考えたものか。

昭和十年から十六年の詠作を戦後になって見直す場合、作者自身の、その詠われた内容に対して時を置いた後の意識の変化も修訂の中に認められる。それが指摘できるものとして、9・12・23の歌がある。

9 番歌は師の道を自らも歩んできたことの確認の歌であるが、「我は来にけむ」の「けむ」を詠嘆「けり」とすることで自らの歩み来たあり方に自恃の思いを読みとることができ、修訂時にはその歩み来し道を確かなものとして自ら評価できるようになったことを示す。

12 番歌では「我はくだれり」を「くだり行きけり」とすることで、夕暮れ、暗い墓の中に入っていくイメージを鮮明にしてその厳かな雰囲気を加える。

23 番歌の左注では自分の足をさすつてくれた若者良彦が既に亡いことを「亡き人なり」とすることであらためて確認する語気を込める。

加えて8番歌では、「梢うごくよと 言ひたまひけむ」の「けむ」を「らめ」と現在推量にして、今もその時の三矢先生の言ったことを推量するという変更が指摘できる。生前の「三矢先生」が講義などのおりにか窓外の梢に動いているのを指摘した、その言葉も明瞭でなかったという。そんな師の姿を今に生かす姿勢が読みとれる。

右のほか、詠作時の高まった感情が時間を置くことで沈静し、その高まり故の言葉のぎこちない組み立てが客観の視座から見直されてその折の心情が明確になり、時にしじみとした情調の世界に変えられているという変化も見られる。

21 番歌では「垢づく襟のあはれさ」を歌の中に指摘された屈辱の思いについて、「歌によみし人、この人なりけむ」を「あやまちをしつ」と変え、より客観視する心境を得ている。

感情の高まりとは言えないまでも、波乱の多かった数年の経過のあと穏やかな心境の中で歌に詠まれた情景を思い起こしその折の心理の機微を、言葉を改めつつ表現している箇所も目立つ。

例えば、1番歌はその年が凶作であった十一月、山の村を訪れ数日後そこを辞した際の心の鬱とした姿を読んだものである。冬に向かう寒村で人々の生活がままならぬ様子を目

の当たりにして超空自身心の消えるような思いを持つ。「我的心の」の「の」はそんな超空の心内を示すように弱々しい語調を作っている。後には「我的心は」としてその心の弱々しさから脱した上で「たのしま」ぬ自らを客体化する。

6 番歌は貧しいながら謙虚に礼節をわきまえた姿に超空が心を温かくした歌であるが、「礼譲知る人は言ふことも」だと超空自身の幾分の不遜さが拭えない。「の」で繋げて超空自身の自我を穏やかにしている。

10 番歌の左注では「寂かな生を営む」を「寂かに生を養ふ」にするところに人生の苦難を経て安らぐ人々への超空の穏やかなまなざしの付加が認められる。次の11番歌詞書では病弱な者「ばかり」を「だけ」とすることは、限定の強い語気を普通のそれにして和らげ、そこに人々の安らぎの生を感じることが出来る。

16 番歌では「へつらひを人に言はれて」の「れ」という受け身を「せ」（使役）に変えることで、へつらいの言葉を老人に言わせる自分の存在を見つめる意識を強める。

24 番歌では親が「よき唄」を教えないことを子供が物足りなく寂しがる様子を推量する作者の心を、「らし」を「らむ」に替えることで、より超空の主体を込めて村の人々の暮らしをいとおしむ眼差しを強めている。

27 番歌ではうとうとと気がぬうちに眠って手に伝う蜘蛛で目を覚ましたという機微の表現「けむ」を捨て、「ねむるなり」の表現を選び直すことで河原に眠るのどけさを詠い上げている。

30 番歌では単なる程度の大きさを示す表現の語「殊に」を捨て、「すでに」とすることで春に向かう季節の情趣豊かな様を月の光に見ようとす。

31 番歌では第四句下にあった「一」を第三句下の位置を移すことで余情を残す箇所を変え、抒情を効果的にしている。

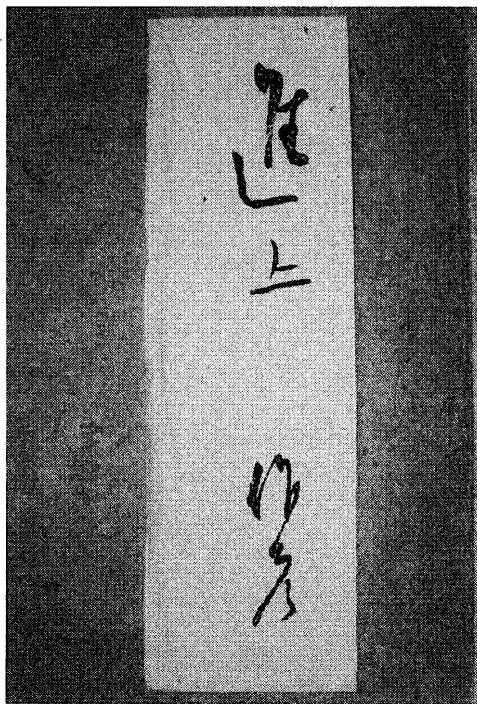
39 番歌では「かく静けきもよろしかりけり」という直接の評価の表現を「かく静けきやすらをむとす」として、その静かさの中に心和ませる作者の姿を描いて、春ののどかな風景を具象化する。

終わりに

民俗的要素をはらむ題材を多く取り上げそこに潜む人間の「あはれ」を歌うという超空の歌の姿は『遠やまびこ』にも見いだせるが、高橋六二氏はこの歌集について「戦時体制に向かう世情への慨嘆と、由縁ある人々への深い情とが交錯して、不思議に沈潜した作品集になっている。」と述べられる（前掲論文）。本書をめぐる敗戦後の段階の修訂では、そ

うした戦争の非常な影を凝視する詠作時の歌の世界を大戦の動乱を経た後にいとおしみつつ見直すことで、特に後者（由縁ある人々への深い情）について、詠出時の情景の描写を的確にし、修訂時の心境を織り交せて対象への穏やかな眼差しを確保しているといえる。その点で「沈潜」を更に繊細で豊かな表現として押し進めたものといえるのではないか。

〔図1〕 表紙内側の遊紙表に貼られた釈超空筆の箋紙



〔図2〕 修訂書き入れの例

